

日本 七、六% 米國 一七、八% 英國 二三%
 佛國 一九% 獨逸 二四% 伊國 四〇%
 にして日本は世界の主なる産業國中最低位にある
 採取労働（スウェッチング・レイバー）に非ざるの辯

日本の労働賃銀は英、米、佛、獨等の諸國のそれに比して成る程低劣である。殊に日本貨幣の國際的價値の低下せる今日に於

て特に目立つて感ずる。しかしそれは所謂シアル・ダンピング問題の構成要素としてみる事は出来ない。何となれば日本の労働賃銀は他國に比して最初から安いのであつて日本商品の輸出貿易が進歩發達するやうになつてから急に低くしたのでない。むしろ他國に比して過去に於けるその増加率が良好なる事は次の統計が雄辯に物語つて居る即ち一九一四年に於ける各種産業に於ける平均賃銀指數を一〇〇として一九三二年に於ける各國の指數増進率を比較すれば
 日本 二六八 英國 一八六 米國 一三五である
 又日本の労働賃銀と労働者の生活標準即ち生活費との相對的比

較を考察の中に入れて見るならば日本労働者の生活内容は絕對的比較に於て低劣なりとさるゝその賃銀の爲めに貧弱とされつゝ、ありと斷定するわけにはゆかない。彼等は実外各自その生活を入間的にエンジョイして居るかも知れない。しかもこれを印度及支那の労働賃銀に比すると支那労働賃銀は日本の二分の一であり印度は六割にすぎない。

次に日本労働者の労働が採取的なりと見らるゝ労働時間問題であるが、これについても左の統計の如く若干の進歩を認むるものである。

即ち日本に於ける全工場 averages 平均労働時間は極めて減少ながら左の如く逐年減少して居る

| | |
|-------|---------|
| 一九二六年 | 九時間三十一分 |
| 一九二七年 | 九時間二十四分 |
| 一九二八年 | 九時間二十一分 |
| 一九二九年 | 九時間十六分 |